

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2006～2010

課題番号：18320112

研究課題名（和文） 日本における漁業・漁民・漁村の総合的研究

研究課題名（英文） The overall research on fishery ,fishermen and fishing villages in Japan.

研究代表者

岩田 みゆき（IWATA MIYUKI）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：40365010

研究成果の概要（和文）：

本研究は、歴史学・民俗学・民具学・水産学の研究分野を異にする研究者が共同し、漁業・漁民・漁村の総合的研究を行い、日本人の伝統文化の特質を海の視座から解明せんとするものである。本研究を推進するにあたり、五つの課題を設定した。すなわち、漁村構造の実態と変化、環境の実態とその変化、漁具・漁法の実態と変化、漁業生産の実態と変化、漁民文化の実態と変化である。これらの五つの課題を設定し、分野を異にする研究者による共同研究会の開催と地域史料調査を軸に四年間の研究活動を推進した。地域史料調査では、駿河湾沿岸漁村と伊勢湾沿岸漁村を中心に調査を実施した。これらの研究成果は、中間報告書・成果報告書としてまとめ、現在のわれわれが海から学ぶ多様な切り口を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this research is that the researcher of the historical science, folklore, the people tool study, and the science of fisheries jointly clarifies a Japanese traditional culture by the viewpoint from the sea. When this research was advanced, the five subjects were set. That is the real state of affairs and the changes of the fishing village structure, the natural environment, the fishing implement and fishing method, the fishing industry, and the fishing culture. These five subjects were set, the joint research association and the regional historical materials investigation were executed for four years. In the regional historical materials investigation, the survey of the Suruga bay coast fishing village and the Ise bay coast fishing village was especially executed. These research results were summarized in the result report. We were able to present various viewpoints learnt from the sea in that.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,100,000	0	4,100,000
2007年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2008年度	2,600,000	780,000	3,380,000
2009年度	2,500,000	750,000	3,250,000
年度			
総計	11,800,000	2,310,000	14,110,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：漁村、漁民、漁業、海村、日本史

1. 研究開始当初の背景

わが国は四辺を海に囲まれ、生きるために欠くことのできない塩や動物性蛋白質を海に依存するとともに、大量の物資の輸送に海を道として廻船を利用してきた。したがって日本の歴史を構造的に知るためには、海の歴史を知り、そのもつ意味を知らねばならない。しかし、いまだに我国の固有文化を表すものとして取り上げられるのは米作中心の農業・農民・農村であり、漁業や漁民・漁村、さらに再生産構造に重要な意味をもつ海運なども含めた、海に関する研究とその位置づけは著しく遅れている。

研究史的にみれば、国内では戦前から渋沢敬三が主催する日本常民文化研究所の漁業史研究室が軸となって技術史・経済史・法制史などの視点からの先駆的業績があり、1960年代には、近世幕藩制社会の中に漁業・漁村を位置づけようと試みる研究、1990年代には漁政史や地域論などの新しい視点に基づく研究成果が登場し、漁業史研究は新たな展開をみせつつある。一方、日本常民文化研究所の立て直しを進める中で、研究史の中に課題を見出すというよりは、むしろ現在の我々が抱えている問題を解決するための糸口を模索する中で歴史を捉えていこうとする姿勢のもとに、漁業史研究や民具研究を批判的に継承・発展させようとする方向性が出されてきた。また、従来の漁業史研究では漁業史の研究はあったが、村や地域の問題として捉える視点が十分でなく、日本の漁村の特徴を「半農半漁」といういいかたで一言で片付けており、その実態が十分に分析されていなかった。そこで、海付でありながら必ずしも漁業を営まない村も含めて「海村」ととらえ、その実態の分析から開始したのである。

このように村や地域の問題として漁業に接近することによって、その関心は、文献史料のみならず、民具や伝承、自然環境など、有形無形の史資料など幅広く向けられることになり、社会科学・人文科学のみならず、自然科学にまで目が向けられることになった。本研究において、歴史・民俗・民具・水産の総合的研究としたのはそういう経緯からである。

ところで、近年では、漁業問題を考える場合に環境問題・資源問題へのとりくみは不可欠となってきている。本研究を企図した大きな理由も、近代以降急速に進んだ日本沿岸部の大きな環境変化・景観変化であり、その中での漁村・漁民の消滅、変容にある。何よりも、そのことによって、海に関する貴重な史資料が消滅しつつあるという現実がある。

このような「海の変化」が我々に何を語るうとしているのかを真摯に歴史的に問うことが、本研究の大きな目的である。そのためにも、まず急速に失われつつある沿岸部の史資料の所在調査を実施し、史料として残りにくい漁民の聞き取り調査などの民俗学的調査、水産学による現状分析なども含めて研究領域を超えた漁業・漁民・漁村の実態の把握が急務であると考えたのである。

2. 研究の目的

本研究は、歴史学・民俗学・民具学・水産学の研究分野を異にする研究者が共同し、漁業・漁民・漁村の総合的研究を行い、日本人の伝統文化の特質を海からの視座から解明せんとするものである。具体的には、漁民の生業・生活の場である漁村構造の実態とその変化、漁業をとりまく海底環境や海流の変化を含む自然環境・社会環境の実態とその変化、それらに応じた漁具・漁法・漁業組織などの漁業の実態と変化、漁業経営と漁業生産の実態と変化、漁民の生活・文化の実態と変化という五つの課題を設定し、これらの課題に、(1)研究分野を超えた共同研究 (2)地域を異にする各地域間の共同研究 (3)経験を異にする世代間の研究の共同 という研究スタイルをとりつつ各研究者がとりくんだ。そして、日本の漁業や漁村の構造、漁民文化の特徴を明らかにすることに努めた。

本研究は、漁業・漁村研究に問題を限定しているが、それは日本の漁業・漁村が、近代化・工業化に伴う公害問題・環境問題・資源問題をもっともラディカルに現出し大きく衰退・変貌・消失しているからである。こうした近代化の波を直接うけてきた漁業や漁村の歴史や文化を研究し、その実態を把握することは急務であり、漁業史研究のみならず、近代以降現在にいたるまでわが国が抱える問題を解明する糸口を見出すことになる。

3. 研究の方法

本研究は、先にみた五つの研究課題と三つの研究スタイルに基づき、(1)共同研究会の開催と(2)地域調査の二本立てで推進した。ただし、実際の調査研究では五つの研究課題についてはそれほど厳密に分担を決めることをせず、一人が複数の課題に取り組むことになった。(1)共同研究会は、年に2~3回実施した。共同研究会では、歴史部門・民俗民具部門・水産部門の各専門分野を異にする研究者の研究を尊重しつつ、各部門の研究分担者・連携研究者が研究成果を互いに報告

し検証しあつた。また、外部研究者を毎年招き情報交換をした。研究会の記録は研究代表者が行った。(2)地域調査は、歴史・民俗・民具・水産の各部門の研究者が合同で行った合同調査と、各自で行った調査がある。歴史部門は岩田・高橋・北村・山口が担当し、文献史料の調査・分析を行った。民具・民俗部門は田邊・谷沢・小島・池田が民具・伝承・景観の調査を実施した。水産部門は松浦が現地調査と文献資料調査を実施した。いずれにしても、調査方法は、それぞれの専門分野を尊重しつつ、文献・古文書・民具・景観・聞き取り調査などを併用しつつ実施した。

調査対象地域については、全国を視野にいれつつも、本研究においては黒潮の流れに沿った太平洋沿岸部、中でも伊勢湾周辺の志摩半島から知多半島沿岸部の漁村と、駿河湾周辺部特に西伊豆から焼津近辺の漁村の二地域に絞って、調査を開始した。後半には比較研究として、鹿児島や瀬戸内海、日本海側の海村の調査も数ヶ所実施した。

4. 研究成果

(1) 分野を異にする研究者の共同研究・研究会の開催 本研究では歴史学・民俗学・民具学・水産学の研究分野を異にする研究者が、漁業・漁民・漁村の研究を、それぞれの視点・方法によって解明し、それぞれの研究成果を比較研究した。これらの研究分野を異にし、また世代を異にする研究者が、共通の研究対象を調査研究し、定期的に研究会を実施することによって、研究の視点、研究方法の違いが明らかになり、それぞれの研究の問題設定、研究方法、対象とする資・史料の取り上げ方の違いが明らかになった。また、それぞれの方法をまずは認め合うことにより、新しい共同研究の方法を確立する可能性を共有することができた。

(2) 新たな資史料論の必要性の確認 (1)で述べたように、異なる研究分野の研究者による共同研究によって明らかになった研究の視点・研究方法の違いを、どのように止揚し、発展させ、これからの歴史や・俗・業史の研究を、近代化・工業化にともなう公害問題・環境問題・資源問題として新たな方法を確立していくかについてはこれからさらに議論が必要であるとの認識をあらたにした。そのためには、史資料の調査や現在漁業を営む人々からの聞き取り調査が不可欠であり、それぞれの専門分野で得意とする、古文書・民具・聞き取りなどを総合したあらたな資史料論の要性を再確認した。

(3) 地域調査の成果 本研究の地域調査

は、主として東海地方の太平洋沿岸漁村、中でも駿河湾沿岸周辺漁村と知多半島と志摩半島に囲まれた伊勢湾沿岸周辺漁村を中心に調査を実施した。また、比較研究として、瀬戸内海・九州北部・東北漁村の予備調査も実施し、全国的視野に基づく漁業・漁民・漁村研究の方法を模索することができた。調査により明らかになった点の概要は以下のとおりである。 いまだに漁村史料調査がなされておらず、調査されないまま資史料が散逸している事実や、調査がされ資史料が残されていても十分な研究利用がされていないことが明らかとなった。 駿河湾周辺漁村と伊勢湾周辺漁村だけを見ても、その漁村のありかた、構造、漁村史料の存在状況に大きな違いがあり、多様であることが明らかとなった。また、漁村は単独では再生産が不可能であり、必ず捕った魚を大量に集荷販売する港町の機能を背後にもっており、自ら漁港として発展していく漁村も存在した。こうした港町と漁村、漁業と廻船業との関係は、従来の研究で必ずしも明かにされておらず、今後の課題として残された。そもそも漁村・海村・港町とは何かという問題の再検討の必要性が提起された。 漁村は、時代の変化の中で大きく変貌する事実が明らかとなった。例えば駿河湾周辺でみると、近世には廻船が中心であった村が近代にかけて漁業を中心にすえる漁村に変貌していく事実、焼津のように一漁村であった村が漁港として発展し大きく姿を変えていく事実など、その変貌ぶりは内陸部の村々にはみられない特徴であることが明らかとなった。 本研究の地域調査では、それぞれの研究分担に応じた地域調査を各自で実施するとともに、異なった分野の専門家が合同で同一地域の史料調査を実施するなど、従来あまり試みられていない合同調査を実施することができた。

(4) 中間報告書・成果報告書の作成

以上の研究成果は、中間報告書として『日本における漁業・漁民・漁村の総合的研究』(平成18・19年度中間報告書2009年)最終年度に成果報告書として『日本における漁業・漁村・漁民の総合的研究 平成18年度～21年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書』2010年3月をまとめ総括した。

田邊は、文化人類学的(含民俗学的)方法によって、我が国民と魚貝藻類捕採の伝統文化とのかかわりの全貌を明らかにし、海村文化の伝統的側面とその源流を明らかにするという大きな目標のもとに、沖合い漁場開拓以前から存在する磯漁を、始原的・根源的・漁撈伝統の原点と位置づけ、

海に関係をもつ日本文化の古層をさぐるための重要な研究主題として取り上げ、磯漁の実態を全国的視野で明らかにすることにとりくんだ。その結果、 我国の漁業には、一方の極にA大資本家による漁業経営と中間層として存在する中小漁業経営者による漁業、他の一方にB零細な漁民による漁業が存在するという生産面での二重構造があること。 漁獲物の種類でみると、A大量生産による一魚種・限られた漁獲対象魚の捕獲をする沖合・遠洋漁業とB磯漁においてあらゆる種類の魚貝藻類を捕採するが、資本蓄積はできない沿岸（地先）漁業といった二重的商品生産の存在することを明にした。 また「磯漁の構造」について、漁場としての構造と漁撈方法としての構造の二つに注目し、全体の見通しを立てた。

谷沢と北村は漁村の集落構造について検討した。谷沢は、熊野灘沿岸と知多半島において現地景観調査と地域史料調査を実施し、 集落における歴史的環境の現況を理解するために、各時代の歴史的な絵図や地図を現代の地図の上に重ねて集落構造の変化を現在から遡及的に解読する。 現地に残存する歴史的建造物、工作物、環境物件に着目して、集落景観の特性を把握し、海辺の集落が歴史をどのような形で現在につなげているかを明らかにする。 という方法によって海民の生業・生活の場である漁村集落の形成過程と変容を明らかにした。その結果、 漁業集落形成の多様性と各漁業集落ごとの独自性を指摘し、集落の立地する自然環境や、地域の歩んだ歴史が集落の性格に影響すること。 漁業集落の景観の変貌が激しいこと、すなわち、自然災害や後継者不足などによる生業の場としての漁村の消失、古い構えの民家の消失、さらに古い家の建替えによる新興の漁業発展による景観変化、漁協の解散・合併による独自性の消失などがみられること。

集落景観がこきざみに移り変わっており、この姿は、農村社会とは異なる点で、海を暮らしの舞台としてきた人々の生き方を反映している点などが指摘された。

北村は、三重県鳥羽市神島を事例に、現地調査を実施し、集落が自然発生的なものではなく、計画性をもっているという視点から、集落や耕地の平面構成を分析し、家相互の関係や集落全体の構成を明らかにすることに努めた。具体的には、現地調査で発掘した明治初年の地引絵図の史料批判を行い、現地と比較検討し、路地の構造から、漁村集落の計画性、空間構造の特質を明らかにした。その結果、 先行研究から、住居の構造と特質について検討し、神島の家屋は均一的で、資産や社会的地位に

よる大きな差異はみられないこと。外見上町家型住居に似た一面があるがその中身はかなり異質であること。神島は漁村の中でも特に密集度が高い集落の一例であること。 明治初年の地引絵図と現在の景観を比較検討し、その結果、絵図から屋敷地の範囲・耕地の多さ・海岸部の土地利用・集落景観について検討し、海岸部の利用に大きな変化がみられるが、集落景観はほとんど変化がないこと。 浜は、通路としての役割をもち、家と浜のつながりが緊密で、集落の三つのセコも、浜と家を関係づけるために成立したもので、ハマを起点として三つのセコ（南セコ・中セコ・東セコ）が成立していること。この三つのセコの内部が論理的空間を構成していること。ハマを起点として南北道が形成され、そこから東西道が分岐して宅地の出入り口を確保していること。 田は、明治初年の地引絵図には記載があるが、現在は田はなくすべて畑であること、などを指摘した。

小島は、知多半島のフィールド調査・聞き取り調査をもとに、知多半島南端の南知多町師崎における船霊信仰についてその特徴を明らかにした。その結果、師崎のオフダサンは、一般的に漁民信仰として知られているサイコロや人形などを祭る船霊信仰とは異なり、日常的に信仰する社寺のオフダを祭るという他の地域には見られない独自のものであることがわかった。この点で、従来一様に考えられていた船霊信仰の実態は必ずしも一様ではないこと、すなわち漁民信仰の多様性が確認された。

池田は、新潟県佐渡島を事例に、明治中期以降 海洋資源との関わりから、漁獲目的となる魚種・魚群の習性に応じた多様な漁具・漁法の技術移動・導入が考案されたが、そんな中で、漁村がどのように資源を守り、再生産を可能にし、持続させてきたのか。漁村の持続性を、資源保全と伝統的な漁具・漁法との関係から明らかにした。その結果、漁業技術と資源保全との関係について、漁業技術とは、自然や魚介の生態に関する知識と、それにあわせた道具とそれを使うための勘をあわせたものであり、その技術が伴うことによって初めて資源の保全と漁村の維持が可能であることを、伝統漁法から明らかにした。

高橋は、古文書史料の検討を通じて、漁業政策の観点から、19世紀の仙台藩における漁業政策・資源保全についての実態を検討し、自然環境の変化と資源管理への意識化について江戸時代の事例を検討した。その結果、19世紀すでに仙台藩において資源保全と環境についての漁業政策が行われており、仙台藩のサケ資源繁殖政策の採用の検討の背景として、サケの不漁状況、

河川の状況変化、森林伐採による土砂流出が考えられること、これは仙台藩士新井宣昭の献策の中に、森林・河川・漁業と山一河一河口へといたる流域管理的な政策ビジョンがあり、「国土」保存政策的な広がりがあったことなどが指摘された。

松浦は、水産学という立場から、静岡県西伊豆田子地区、伊勢湾周辺離島地区、静岡県～和歌山県にいたる太平洋中区、東京湾・三河湾・広島湾など各地の漁業の展開過程と、漁村・漁業・加工業の存立条件を明らかにすることに努めた。静岡県西伊豆町田子地区では、かつお一本釣漁業の展開過程、かつお釣り漁業とかつお節製造業との関係を検討し、かつお節製造業者の存続条件を明らかにした。また平成になってかつお釣り漁業が消滅した田子地区と現在も継続している焼津地区の比較検討をし、その展開過程の相違を明らかにし、田子地区の存立条件を明らかにした。伊勢湾離島地区では、イカナゴを対象にして、三重県と愛知県における機船船引き網の変遷、漁業地区の盛衰の経緯、資源管理の沿革を分析し、離島における機船船引き網の漁業活性化条件を明らかにした。太平洋中区では、全国的にみると漁獲量が最小である太平洋中区における沖合底引き網漁業の展開過程を明らかにし、なぜ不利な中区で現在でも沖底経営が持続しているのか、その存続条件を明らかにした。東京湾・三河湾・広島湾では、アサリ漁業の展開過程を明らかにし、漁業環境の変化、アサリ生産が盛んな漁協における漁業の動向、浅場造成、種苗放流、潮干狩りの実態などの把握など、アサリ漁業の展開過程の分析をする。さらに漁場環境の改善をはかる視点から、小学校の環境教育の動向を把握し、漁業活性化条件についても分析した。

岩田は、静岡県沼津市平沢地区と、賀茂郡松崎町石部地区の漁業生産について、現地史料調査をもとに、その実態を明らかにした。具体的には、立切網漁業地帯である西浦村平沢集落の近世から近代への移行期における漁業生産の実態と変容を明らかにする。西伊豆の海村である石部村の近世・近代における漁業生産の実態と、海村としての生業の多様性について明らかにすることに努めた。その結果、平沢村は海付でありながら江戸時代には漁業を行っていなかったが、幕末から漁業を再開し、明治期にはいって本格的に漁業に従事するようになった。その背景には、江戸時代に村の主要な産業であった江戸や沼津向けに産出された薪炭が、樹木の伐採しすぎによって生産が困難になったこと。伊豆の薪炭の質が悪く江戸で売れなくなったことなどが上げられる。石部村は、田

んぼが多い村で、漁業はそれほど盛んな村ではないが、それでも江戸時代を通じて漁業にかかわりを持ち、明治にはいっても漁業に従事していたことが史料からわかった。史料によると、江戸時代カツオ漁・カツオ節で栄えた田子村に向けて、漁獲した魚を大量に販売していた事実がわかり、田子のカツオ節が、石部村など近隣の漁村から材料を買い集めていたことなど、田子村との関わりが明らかとなった。

このように、漁村といっても近世と近代との間に大きな変化が存在したことがわかり、その変貌の一端を古文書史料から明らかにした。また、海村といわれ、漁業のみでなく多様な生業をもつ海村の実態を明らかにした。

山口は、既に蓄積した海村・漁村研究をもとに、海にいかにか学ぶか、といった根本的な問題提起をした。また、平成18年と19年には上海水産大学において、「日本漁業の歴史と現状」「漁業の近代化と漁村の変貌」と題して学会報告を行った。

これらの研究成果をあえて、当初設定した五つの課題にあてはめるならば、田邊の磯漁の構造、伝統漁法の研究は、谷沢の漁村景観・空間構造に関する研究は、北村の漁業集落景観・空間構造に関する研究は、小島の漁民信仰に関する研究は、池田の環境・資源保全と伝統的な漁具・漁法に関する研究は、高橋の仙台藩における環境・資源保全と漁業政策に関する研究は、岩田の海村の生産構造と漁業経営と漁村の変貌に関する研究はに該当する。山口は研究全体の方向性を示すものである。

研究目的の中で、「こうした近代化の波を直接うけてきた漁業や漁村の歴史や文化を研究し、その実態を把握することは、漁業史研究のみならず、日本が近代以降現在にいたるまでわが国が抱える問題を解明する糸口を見出すことになる。」と述べた。これらの研究成果により、現代に生きる我々が、「海から如何にか学ぶか」という問題について、重要かつ多様な切り口を提示できたといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

岩田みゆき 「史料紹介 豆州君沢郡土肥村「天保十四卯年日記」について(上)(下)」
青山史学 26,27 2009,2010 査読無

田邊悟 「徳島県浅川における磯漁伝統」徳島県立博物館研究紀要 19 2009年
PP15-20 査読無

〔学会発表〕(計2件)

山口徹「日本漁業の歴史と現状」2006年
上海水産大学国際学術研討報告

山口徹「漁業の近代化と漁村の変貌」2007年
上海水産大学国際学術研討報告
〔図書〕(計1件)

『日本における漁業・漁村・漁民の総合的研究 平成18年度～21年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書』2010年3月 査読無
岩田みゆき「豆州西浦村平沢の漁業生産について—近世から近代へ—」PP.401-438

岩田みゆき「幕末から明治期における石部村の漁業について - 静岡県賀茂郡松崎町石部地区漁村史料調査中間報告」PP.439-482

田邊悟「日本磯漁伝統の研究」PP.15-70

田邊悟「三重県尾鷲市須賀利町須賀利浦の歴史と民俗 生産構造の二重的性格を中心に—」PP.71-84

小島孝夫「知多半島の海とくらし—知多半島のオフダサンをめぐって—」PP.227-238

谷沢明「知多半島における漁業集落の形成過程 事例研究: 愛知県南知多町」PP.171-226

谷沢明「熊野灘沿岸における漁村の集落景観 - 三重県志摩から尾鷲にかけて—」PP.85-170

北村優季「鳥羽市神島の集落とその構造地引絵図の分析を中心に—」PP.239-274

松浦勉「静岡県西伊豆町田子地区におけるかつお一本釣漁業の展開過程とかつお節製造業者の存立条件」PP.275-284

松浦勉「伊勢湾周辺離島地区におけるイカナゴ機船船びき網の展開過程」PP.285-298

松浦勉「太平洋中区における沖合底びき網漁業の展開過程」PP.299-316

松浦勉「東京湾におけるアサリ漁業等の展開過程」PP.317-334

松浦勉「三河湾におけるアサリ漁業の展開過程」PP.335-358

松浦勉「広島県におけるアサリ区画漁業の展開過程」PP.359-372

池田哲夫「漁村の持続性 海の資源と保全 新潟県佐渡島を事例に—」PP.373-384

高橋美貴「一九世紀の仙台藩における資源繁殖と流域管理構想」PP.385-400

山口徹「海にいかに学ぶか」PP.483-486

山口徹「日本漁業の歴史と現状」PP.487-492

山口徹「漁業の近代化と漁村の変貌」PP.493-498

6. 研究組織

(1) 研究代表者

・岩田みゆき (IWATA MIYUKI)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号: 40365010

(2) 研究分担者

・田邊悟 (TANABE SATORU)
千葉経済大学・経済学部・客員教授
研究者番号: 20083107

・小島孝夫 (KOJIMA TAKAO)
成城大学・文芸学部・准教授
研究者番号: 60286903

(3) 連携研究者

・田上繁 (TAGAMI SHIGERU)
神奈川大学・経済学部・教授
研究者番号: 90409847

・池田哲夫 (IKEDA TETUO)
新潟大学・人文学部・教授
研究者番号: 50313490

・谷沢明 (TANIZAWA AKIRA)
愛知淑徳大学・現代社会学部・教授
研究者番号: 80227230

・松浦勉 (MATUURA TUTOMU)
独立行政法人水産総合研究センター・水産
経済部動向分析研究室・国際漁業政策研究
員

研究者番号: 00371857

・藤原良章 (FUJIWARA YOSHIKI)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号: 60173499

・北村優季 (KITAMURA MASAKI)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号: 20177869

・高橋美貴 (TAKAHASHI YOSHITAKA)
東京農工大学・大学院共生科学技術研究
部・准教授
研究者番号: 90282970

(4) 研究協力者

・山口徹 (YAMAGUTI TETU)
神奈川大学名誉教授